



Rorschach

初期論文の三症例のロールシャッハ・プロトコル

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-04-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川原, 稔久 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005313

Rorschach 初期論文の三症例のロールシャッハ・プロトコル

川原 稔 久

1. 問題と目的

Rorschach 論文集 (Rorschach, H. 1965) の編者 Bash は、その緒言 (Bash, K. W. 1965: 12) で触れたように、Münsterlingen の州立医療保養施設での病歴資料の五編を、オリジナルの論文に補遺として、編入している (川原 2016: 4)。そのうち二編は、Ellenberger とともにこの論文集の基礎となった一次資料を蒐集した、Kuhn, L. による数行の簡単なメモであるが、残り三編にはオリジナル論文で扱っている患者の病歴とロールシャッハ法の記録プロトコルが掲載されている。いずれのプロトコルも Rorschach 自身によって施行・記録されたものではないが、論文で扱われた患者についての Rorschach による理解と議論を検討するうえで興味深いと思われたので、ここに簡単に紹介する。

なお、ここでは『精神診断学』(ロールシャッハ, H.1998/1972) という邦訳のテキストに従ってドイツ語によるプロトコルのスコアや記号を記載し、プロトコルの解釈等も Rorschach 自身の分類・整理に準じて記載しようと思う。また、一部陰影の影響を取り入れたスコアがあるが、それについては『ロールシャッハ 精神医学研究』の邦訳 (ロールシャッハ, H. 1986/1965: 238) に依拠して、「Hd は判断が本質的に陰影に影響されたことを、FHd は判断がシミの形から生じたこと、だが陰影も作用していること」を示している。反応番号に付されている a・b・c・d の記号は図版の向きで、それぞれ正位置・右側縁上・反対位置・左側縁上 (Rorschach, H. 1948/1921: 227) を意味する。さらに、プロトコルは患者の口語で記載されているため、一部の訳においては、筆者の不明な俗語や口語的な言い回しに関して意識を行わざるを得なかった。そのため、正確な逐語日本語訳となっていない箇所がある点は、後日正確を期したい。

2. 論文「《反射幻覚》とその類似現象について」

(1965/1912) の補遺について

この論文は Rorschach の学位請求論文であり、筆者 (川原 2015: 3) が言及したように、「第一の知覚からそれに影響を受けた別の領域の知覚が生じる現象を反射幻覚と定義し直し、視覚と運動感覚とは動きの類似性を契機に相互に解発し合う可能性があることを示唆」した論文である。そのなかで Rorschach は自身

の経験も含め多くの観察例を挙げて上記の可能性を例証しようとしているが、Kuhn が見出したように、観察 2, 8, 9, 12, 19, 21, 22, 24, 28, 32, 34, 35 (合計 12) は患者に関係しており、その病歴は Münsterlingen の医療保養施設で確認することが出来る。とくに観察 8 の場合に扱っている男性患者 J (当時「40 歳の分裂病 (妄想性痴呆)」) について、Rorschach は、珍しい運動感覚現象を持っているとして、絵に描かれている人間ばかりでなく動物や題字のような無生物 (他に白熱電灯のフィラメント等) にも自分が変容するという訴えを紹介し、「視覚的な印象は、ありあわせの運動感覚的な諸性質から平行的な感覚を選び出すに違いない、そしてこれらの感覚が継起の出発点となって、何らかの種類の感覚的知覚として意識に到達するのであろう」(ロールシャッハ, H. 1986/1912: 53) としている。

この患者 J に関して、Bash は以下のように補遺として取り上げている (Rorschach, H. 1965/1912: 149-152)。

「観察 8 の場合に扱っている患者について、Hilfiker (著者付記: Hilfiker, K. 1927. Die Schizophrene Ichaufflösung im All. *Allgemeine Zeitschrift für Psychiatrie*. 87, 439-469.) が当該施設からのある研究で記載しており、Jaspers が彼の『一般精神病理学』のなかで引用している。その患者 J. E. (筆者付記: Jakob, E. 1871 生) は、Hilfiker が《Ernst Wetter》という空想上の仮称を与えており、《遠大な空想のパラノイア患者》とみなしていて、以下のように詳述されていた。《彼の父親は乱暴で、母親は意志薄弱であった。小学校卒業後、彼は外国で 18 歳を迎えた。彼は染色工として多くの場所にいた。1903 年に彼は結婚をして一人の息子を持った。彼は社会主義運動に熱心に参加し、そこでは仕事の場合と同様に彼の聡明さが高く評価された。1912 年彼は農場を買い、りっぱに経営管理した。1914 年の戦争勃発以来彼は内的な不安を感じた。1918 年の配給の際に彼は連邦議会宛で首長に以下の手紙を書いた。: 大百姓の場合は、所有物を提供する代わりに保留することのないように調べさせるべきである、と。そのあと夜に彼は怒りの状態になり朝にはある医者に瀉血を求めた…長く眠れない夜の後、彼はカミソリで前腕の動脈と気管を切った…、彼は川へ走った…、家に戻った、そこから家人は彼を病院に連れて行った

…この行為の原因として世界の不公平な設えへの強い恐怖と不満を彼は述べた。》著者は患者の妄想観念を次のように描写している。《‘自営を保つことができる農夫はヨーロッパでただ一人だけであり、それが私である。他のすべての農夫は単なる人工の農夫にすぎず、彼らは自営を保つことが出来ない。私が全く不出来の果物畑を見やるかそこに立ち入るならば、その後でその果物畑は素晴らしい収穫をもたらす。私は果物を産みだす身体であり、私は世界の身体である。’彼は妻と息子とともに三つの国際的な民族を形成し、大地族と水族と太陽族であり、太陽と月と宵の明星（日の入り前の金星）に相当する。‘我々が我々の内に三つを熱く持つほど太陽をよりよく作ることが出来る…自ずから保つことが出来る国家はない…世界が貧しいとき、世界は私を呼びに来なければならない。世界は世界の代理を持たねばならない。代理がなければ世界は崩壊する。’》]

Bash の補遺における Kuhn の付記によれば、この患者は 1910 年 11 月 15 日から亡くなった 1946 年 2 月 16 日まで Münsterlingen の施設にいたが、それまでは Burghölzli と Rheinau と Wil の病院に入院していた。重要なのはとても興味深い患者で、後にはなおともて創造的でさえあったことである。Münsterlingen の病歴には彼に関するより多くのロールシャッハ・プロトコルがあるとのことだが、以下が、医学博士 Schürmann によって 1941 年 11 月 28 日に実施・記載されて、補遺に記載されている。

- I 1. そこに人間と鳥がいて、鳥はとにかく黒いところにおいて、そこで男が埋葬されている。そこには複数の人物がいる。そこに一人（上）とそこにもう一人（他の側）、そこに翼（側）。白いところ（間）で、彼はまた白い肌になるはず。丸い斑点はおそらく瞳（灰色の中の黒）でしょう。それ以外はもう他に見えない。人はカプチン会修道士のように自然に帽子を身につけている（上の人）。そして脊髄（真ん中）、脇の下（上の間）、腰尻（下の間）。他にはもう何も分かりません。あなたに見えるでしょう、ほら、性器があります（真ん中の間と下の間）。G HdF-M 記述
- II c1. 鳥の絵。GF-T
2. 血の類いか毛の類いがある（下の赤）、そこにくちばし（中央下）、そこに尻（下の赤）。D Fb 血
3. 賢明さの色、というのも、白は鳥の背中の中

色にできる（間）、そしてやはり血の色（上下の赤）。DZw Fb 賢明さ Abstr. 抽象 Deskr. 記述

- III 何があります？
c1. また鳥の部類。そこに翼と頭（下）、そこに翼（黒人の箇所）D F-T
2. 魚。D F+T
3. 内臓の血の色、尻である（黒人の頭に当たる箇所）。血の色については人間の中にまた入っていく（中央の赤）。この図版ではそれがすべてです。D Fb Anat 解剖 血
- IV c1. ええ、何か違うもの、フクロウのようなにちがいない。宵つ張りかなにか。言えるのはそれで全部。G FHd+T
2. また人間の何か（上側の縁）で、集まって形を作っている姿で、確かにもう一部は離れていっているが、まだ全部ではない。Dd F-M 保続
c. たぶんまだいろいろなものがあるけど、言えない。いろいろな場所で繋がって、それで終り。Impr. 印象
- V 1. コーモリでしょう。GF+T 平凡反応
2. 全体でまた人間に変わって、それは同じよう。あなたはもっと望むの？たぶんあなたにはもっと分かるのでしょうか！GF-M 保続
- VI 1. いも虫、いも虫の類いで、全くのお話。そこは頭（上）で、色のなかでいも虫がどうなのか言えるくらいならば、短く描ける（いや、あなたはもっと話す）。それ以外には見えない。D F±T
2. また人間に変わる。D F-M 保続
- VII c1. 蝶、なお特徴を考えるべきで、その特徴を他の生き物に持ってきて、虫なのか他の何なのかどうか。D F+T
- VIII 1. 鳥類 D F-T
2. ちょっと待って、虫類よりも熊の類に変わっている。D F+T 平凡反応
3. 血の状態が含まれていて、後からそれを翼の状態に手渡せる（中央、赤）（他には？）そのままにしておくことができる。それですべて！D Fb 血
4. 人間らしさに向かっている、それは同じまま。GF-M 保続
- IX 1. 血の虫 G FbF Blutwurm
b2. そこはやはりまた人間らしさへ向うことができる（茶色）D F-M

そこは吹き口で、そこで血を吸う。(他にはまだ何か?) それは妥当で、すべての変化は気候風土を通じて生じて…

- X 1. ネズミの類い、全部ネズミの色です。(茶色、緑色、灰色)そして、他の全部が含まれて、既に見た他の図版の場合でも同じように。(他にまだ何か?) もう一度考えていることも落ち着かせねばならない、そう! G FbF・T

このデータは患者Jが70歳のときのものである。反応数はおそらく平均内であり、反応時間からは比較的じっくりと取り組んだ様子が伺える。領域の把握は漠然全体反応が多く、良質の形態視が伴った全体反応は少ない。部分反応は色彩や濃淡が混じる図版(Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ)で多く見られ、把握の継起は緩いと思われる。それと同様の傾向で、良質の形態視は保たれにくく、形態視の割合も低ければ形態視の質も著しく低下することが多い。その多くは全体反応か、変容する人間像の反応、鳥の反応である。第Ⅰ図版、第Ⅱ図版、第Ⅴ図版、第Ⅷ図版、第Ⅹ図版で、漠然形態刺激の全体を使おうとして形態視の質が低下することと、人間像が変容するために部分反応であっても形態視の質が低下する。また鳥の反応は第Ⅰ図版から頻発しており、患者Jにとって特別な意味のあるイメージなのかもしれないが、そこまでは分からない。色彩刺激に対しても形態視が優位に立つ反応はなく、とりわけ血や解剖概念に結びついた一次的な色彩反応が多く(第Ⅱ図版、第Ⅲ図版、第Ⅷ図版、第Ⅸ図版)、情動の不安定さよりもむしろ衝動性が高いと言えるであろう。そしてこの情動や衝動を安定化させる内的な資質の反映とされる運動反応は皆無である。

つまり体験型は運動反応:色彩反応=0:8で、極端な「自己中心的な外拡型」(ロールシャッハ, H.

1998/1972:205)と言えるであろう。また、Rorschachの分類によるならば、妄想型よりもむしろ破瓜型や緊張病型の体験型パターンに近いと思われる(ロールシャッハ, H. 1998/1972:203)。患者Jは本の絵にある人間や動物の姿勢を真似ることが気晴らしであるという(ロールシャッハ, H. 1986/1912:53)。内面的な運動感覚と対立的な関係にある運動性が患者Jにおいては活性化されていると考えられる(ロールシャッハ, H. 1986/1912:74)。患者Jが自らの身体を豊穡な世界であると訴えた背景には、内的な素質の乏しさゆえに、世界と一体化してしまうという運動性があるのではないであろうか。

そうした症状との関連で反応に特徴的なのは、患者に想起されるイメージのうち人間のイメージに動きがあるようで、第Ⅰ図版と第Ⅲ図版は解剖的なイメージや血のイメージに動きがあり、第Ⅳ図版では人間の分離や結合あるいは融合のようなイメージで、第Ⅴ図版と第Ⅵ図版、第Ⅷ図版、第Ⅸ図版の後半では保続として、人間や人間らしさへの変容のイメージが動いている。第Ⅴ図版と第Ⅷ図版では同じ状態が続いていることにわざわざ言及する場面があり、逆に動きが活性化していると推測されるほどである。また、第Ⅷ図版では虫から熊に変容している可能性も示唆され、そこから動物から人間への変容のイメージの可能性が考えられる。第Ⅴ図版、第Ⅵ図版、第Ⅷ図版、第Ⅸ図版などでは人間への変容がその直前の動物概念から生じている可能性が考えられるのではないであろうか。つまり患者Jにおいては、内的な衝動を、内的資質によって人間化する方向ではなく、外的な人間イメージを模倣する運動性によって、人間化する方向で体験されたのではないであろうか。

Table 1 患者Jのロールシャッハ・データ

時刻 :10.15	-10.45	実験時間 :	30分	反応時間 :	86秒	
G+	2	F+	4	M	5	V 平凡反応
G-	6	F ±	1	Md	1	Abstr. 抽象
DZw	1	F-	8	Anat 解剖	1	Deskr. 記述
D	11	FbF	2	Blut 血	3	Impr. 印象
Dd	1	Fb	4	T	10	Pers. 保続
		FHd	1	Weish. 賢明さ	1	Blutwurm
		HdF	1			
	21		21		21	
反応数 21 (7)	体験型 :	OB:8Fb	V 平凡反応 =2	F%=34.61%	T%=47,60	f%=61,89

3. 論文「ある分裂病患者の絵画についての分析的覚書」(1965/1913a)に付された補遺について

この論文は、40歳の未婚男性で「先天的精神薄弱」と「分裂病」の状態にある患者Eが、小冊子にあって手本となった「晩餐」の木版画に描いた修正点を、「象徴的思考」の自律性の証明になるとして解釈したものである。主な修正点は、①ヨハネがキリストに「しなだれかかっている」、②ユダの短い「ごわごわ」の髪の毛、③キリストの女のような長い髪、キリストとヨハネの着衣の光背である。患者Eによる自身の幻覚妄想状態と修正点の説明は首尾一貫していて、要約すると次のようになる。①父親はEが稼げないので結婚は出来ないという。金のために愛を裏切ったユダと同じで、愛の象徴である長い髪を持つ資格はない。②母親は愛を意味する長い髪を持ち、Eが結婚を望んだ少女も長い髪をしていた。キリストは長い髪を持つ少女であり愛を象徴し、暖かい太陽であり、光背を持つ。③キリストは、すべての人間が結婚できるよう願い、自己満足を追求する罪を犯さぬよう、世界の罪を背負って死んで後から来る人の罪を救った。④絵が完成すれば自分はヨハネになりヨハネのようにキリストのそばにいて自分も救われる。つまり、患者Eの表現は自身の限界を愛でもって救済してほしいという願望的思考を象徴的に実現している、ということになる。

この患者EについてKuhnは以下の補遺を書いている。

「Hermann Rorschach が報告した絵画の書き手は、Eduard F. で、1875年9月27日生まれで、Münsterlingenの施設に、1911年11月24日から1912年6月27日までいた。この間、彼はRorschachに徹底的に診察された。そして、Münsterlingenの施設の文庫にはRorschachの手によって書かれた24ページの病歴が、晩餐会の絵の写真と患者の肖像の写真とともにある。二つの写真は明らかにRorschach自身によって作成されていた。患者が使った手本は病歴のなかには含まれていないし、他の絵もない。にもかかわらず、病歴にはなおさまざまな患者に関する文書を見いだすことが出来る。

1916年11月2日に、Eduard F. は、鬭争癖と威嚇的な振る舞いゆえに、二度目のMünsterlingenに入れられ、1917年3月31日までその施設に留まった。彼はしばしば無礼な手紙を書いた。-施設で彼は刺激され、折に触れて混迷状態あると思われた。彼は「汚物」からの声を聴いて、強く宗教問題に没頭して、彼の思考過程でしばしばまさに混乱した。彼は人が彼をあざ笑うことを訴えていて、彼はいろいろな紙切れに雑多な絵を複写して、晩餐会の絵のように、その都度オリジナルの絵を拡大していた。

施設ではそれから十年の間Eduard F. のことをもはや聴くことはなかった。1948年施設は患者の姉妹の一人を器質的な脳の混乱で外来の診療所で診察した。この機会に判明したのは、彼がまだ生きていたことである。彼は平凡な画家として働いていたが、もはやその職に満足できなかったほどである。彼は姉妹と暮らして、変わり者の人生を送った。患者を精神医学的に診察する試みはすぐに失敗し、彼は1948年州立保養院に措置された。

そこで我々が見たのは身体的にも知的にもひどく崩壊した男だった、彼は確かにある程度時空間の見当識はあったが、正確な情報を受け取るほどの状態にはもはやなかった。彼はなおMünsterlingenの施設にいたことを認識していたが、この滞在の日付は間違っていた。それでもなお彼が覚えていたのは、晩餐会の絵を描いたことだった。その後も彼は絵を描いたが、ただの花の絵だった。それ以外、彼について何らかの情報を受け取ることはもはや出来なかった。それでもなお患者と一回ロールシャッハ・テストをすることはうまくいった。それから、Eduard F. は1948年6月3日に亡くなった。

晩餐会の絵について：原画の大きさ：2m×1.35m。十分な技術無しに油絵でキャンパスの上に描かれている。この絵は既に悪い保存状態だが、それはしばらく不適切な場所に保存されていたからでもある。医学博士G. LierはMünsterlingenの医療施設の上級医師で、先日複製を専門的に修復している。」

続いて補遺には、患者Eが亡くなる少し前の1948年4月30日にA. Christによって実施されたロールシャッハ法のプロトコルと整理表が以下のように記載されている。

I 私はいどく病気ですー

1. ワッペン - おお - だんだん違ってきた - (?), 休まない (患者はとても虚弱で、ひどく荒い息づかいにならざるを得ない)。G F-Obj Wappen
2. -それと、二つのようで - 壺 (中央)。D F+ Obj
3. それは壺で持ち上げている (側), 良く知らない。D B+M

II 1. 二人の道化師。G B+M 平凡反応

- III 1. ええ、それは (笑いながら) 二人のひょうきんもの - クロミケル (どうやら道化と喜劇役者コメディアン)の混合) - 何かか - ええ -。G B+M 平凡反応

- IV 何かあるはず？ - 何を言わねばならないの？
 1. そう，樹 - クリスマスツリーかもしれない。
 G FHd- Pfld
- V 1. それは夏鳥 - 孔雀かもしれない。G F+ T 平凡反応
- VI 1. それは十字架 - (上)，それはいろいろな全部で，いつか後で見えるように - (唾液過多でいつも繰り返しひどく咳き込む)。D F+ Obj Relig. 宗教
- VII 1. それはしらかめ面 (2/3) で，ビール瓶を持っているよう - そしてその他に， - 何かあって - いろいろに見える。D F+ Md 平凡反応
 2. 飲食店のよう，誰か来たときに，開けられる (3/3)。D F- Obj
- VIII ええ，ちょっと，そう 何も浮かばない，何かは分からない，はっきりしない。 - (?) それは絵のよう，そこで人はいろいろと考える。
 1. 夏鳥 (青)。D FFb+ T
 2. 甲虫 (赤 側)。D F- T
- IX 1. しらかめ面 (オレンジ色)。Do F+ Md
 2. そしてそこは食器 (緑色)。D FbF Obj
- X 1. いも虫のいろいろな部分 (赤)。D F+ T
 そして，それで言えるのは，
 2. 葉のよう (黄色 側)。D FbF Pfld
 3. それと，言えるのは，葉の成分 (緑 中央)。
 D FbF Pfld
 4. そう， - 葉の一部 (青 側)。D FbF Pfld Pers. 保続
 5. そして，樹の部分 (灰色 側)，他にはない！
 D FbF Pfld

患者Eは亡くなる直前73歳で上記のロールシャッハ法データを示したことになる。反応時間は比較的短いのでそれほど吟味せずに素早く反応を産出したと思

われるが，19個の反応は決して少なくはないと思われる。また平凡反応も四つ (第II図版・第III図版・第V図版・第VII図版) あり，ある程度常識的な見方が可能である。ただ，把握は，最初全体反応で頑張っていたが，おそらく疲れてきたのであろう後半が部分反応のみとなり，それが反映して反応全体ではD型となったのではないだろうか。つまり本人も反応しているように，疲れやすい状態であるのが特徴ではないであろうか。ただし，把握の継起に混乱はないと思われる。それを反映するのは保続 (同じ反応が比較的多いと思われる) の傾向もあることであろう。

知的機能の低下を反映してか，Do反応が一つ (第IX図版のオレンジ部分に「しらかめ面」) が出たのは特徴的で，絵の微小部分に修正を加えた患者Eの傾向を反映していると思われる。また，良質の形態視の割合も3割程度と低く，全体反応の少なさ・部分反応の多さ・動物反応の割合の低さ・運動反応の多さ・色彩反応の多さ等は，軽度の知的機能低下を伴う妄想患者の反応パターンに当てはまるであろう (ロールシャッハ, H. 1998/1972:195-202)。とくに体験型は運動反応: 色彩反応 = 3:5.5の，どちらかという両等型である。生産的な妄想患者の場合よりもやや外拡的であるのは，第X図版で多くの色彩優位反応を産出した影響かと思われる。というのも，運動反応は平凡反応二つと良質形態視を伴う反応であり，いずれも内的な資質がありながら，色彩刺激には形態視が低下し，情動が不安定化する傾向にあるからである。あるいは，患者の職業が画家でおそらくは複製を良くした傾向の反映かもしれない (ロールシャッハ, H. 1998/1972:203-206)。

とくに特徴的だと思われるのは，曖昧形態刺激を見ながら患者にはいろいろのイメージが動き出してさまざまに見えているのではないかと想像させるような反応をする点である。第I図版の最初の反応の最中に

Table 2 患者Eのロールシャッハ・データ

14.32-14.42	実験時間： 10分	反応時間： 32秒					
G+	3	F+	6	M	3	平凡反応	4
G-	2	F-	3	Md	2	保続	1
D	13	B	3	T	4	Wappen	1
Do	1	FFb	1	Pfld	5		
		FbF	5	Obj	5		
		FHd	1				
	19		19		19		
反応数 19(9)	体験型	3B:5+1/2Fb	平凡反応=4	F%=67%	T%=21%		

は、「おおーだんだん違ってきたー休まない」と語り荒い息づかいになり、第Ⅵ図版の「十字架」反応については「いろいろな全部で、いつか後で見るようにー」と言いながら咳き込んでしまうため言葉が途切れる。第Ⅶ図版では「いろいろに見える」こと、第Ⅷ図版では「絵のよう、そこで人はいろいろと考える」と注釈までしている。視覚的な刺激を介して内的な運動感覚やイメージが投影されて実現される患者の傾向がデータに表れているのではないかと思われる。

4. 論文「神経症者における友人の選択について」

(1965/1913b) の補遺について

この論文は対象選択に無意識的要素が関与していることを示そうとしていて、対照的な友人選択と夢における対照的な両親像との対比を詳細に検討して無意識的選択を描写している。取り上げられたのは対照的な友人を持った22歳男性患者G (August G. 1887年生)であった。「分析を受けにやってきた」(ロールシャッハ, H. 1986/1913b: 86) とはあるが何が症状でどのような主訴であったのかは記載されていない。Gは知識欲旺盛で比較的高い教養の持ち主であったが、懷疑家で「気分の人」で一つのことに集中できない、「お母さん子」で父親に対しては畏怖と反抗の入り混じりを感じてきた、とある。

この論文の補遺の最後 (Rorschach, H. 1965/1913b : 187-188) に、Kuhn が「後の診断はその都度精神薄弱と慢性のアルコール中毒と書いていた。死後、内外の水頭症を伴う重篤な全般性の脳萎縮が見つかった」と書き、それを承けて Bash が「人は、後の診断を、驚愕を持って知ることになったし、神経症がアルコール中毒を導いたのかどうか、このアルコール中毒が器質的な低能を導いたのかどうかを問う」と書いている (Rorschach, H. 1965/1913b : 187-188)。Kuhn によれば、「この患者は1912年4月23日に一度 Münsterlingen の

医療施設に入り、全部で5度そこにいた。3度目の入院は1916年から1924年で、4度目の入院は1936年から1945年までであり、その際患者は9年間休職し、5度目の入院は1950年から亡くなる1957年3月18日までであった。後の診察では知能検査が言及されており、それは1950年12月9日に実施され、知能年齢が8歳3ヶ月で知能指数が55と判明した。」

1950年12月14日に A. Christ によって実施・記載されたロールシャッハ・プロトコルと整理表が以下である：

- I すぐに言えるのは、ー全部 黒と白 (？)。Fb.N.
 - 1. 亀か、何か、ー頭に何かある。GF-T
- II 1. 分からないけど、動物に関する何か、ー二つの頭がそこにあるかもしれません。DF+Td 赤は分かりません。Fb.N.
 - 2. あるいは肉か何かははずです。DFb 肉
- III 何かあるはずとか、わかりませんー
 - 1. 思うに、水鳥かもしれません、知りませんが、Widnau で見えています (黒)。DF-T
- IV 1. 分かりませんが、動物の何かで、ー何かは分かりません。GF-T
- V 1. やはり分かりません。ー (?) 本当には分かりません。ーはっきりしません。Versager 失敗反応
- VI 1. 何か分かりません、ー動物かどうか、分からない何か。GF-T
- VII 1. 雲かもしれません、ーでも真ん中は思いつきませんーGHdF+N/雲
- VIII 1. そこは二匹の動物ーDF+T 平凡反応
動物が何かは分からない、狐ではないし…
- IX 何か分からないー (?)
 - 1. 雲ではないしーGHdFFbF-N/雲
 - 2. 植物ではないし、いずれにせよ種まきでもな

Table 3 患者Gのロールシャッハ・データ

16.01-16.12	実験時間：	11分	反応時間：	55秒			
G+	1	F+	3	T	7	平凡反応	1
G-	5	F-	5	Td	1	Fbn	1
D	6	FbF	1	Pfl	1	雲	2
		Fb	1	N	2		
		HdF	1	肉	1		
		HdFFbF	1				
	12		12		12		
反応数：	12 (5)	体験型：	OB:3+1/2Fb	平凡反応=1	F%=37%	T%=67%	f%=67%

いし。G FbF- Pfi

d 3. そこは二匹の動物でしょう、緑のところ。D F-T

分かりません -

X 分かりません -

1. 春のカブトムシのようか、それとも何か -
分かりません (青の側)。

D F+T

他には分かりません。

1950年の時点で患者Gは63歳であり、アルコール中毒の慢性化による脳萎縮が生じ、知的な機能が低下した状態にあったと推測される。反応数が少なく、反応時間も短く、良形態の全体反応が乏しく、漠然とした形態の全体反応と部分反応が把握の中心である。ただ、把握の継起は通常の全体反応と部分反応が中心であり、DdやDo反応は無く、患者が本来持っていた知的機能の名残を反映しているかもしれない。また、多くの反応は「分かりません」とか「～でない」と否定形で語られながら、そこに暗に対象と概念が着想されていることが分かる点も、患者が本来保持していた機能の名残を反映しているかもしれない。

しかし、動物反応が多く運動反応が皆無である点は、紋切り型化が進んだ、知的機能の低下に典型的な反応パターンである。色彩に対する反応は明らかに形態性を後退させており、情動に対する不安定さを表していると思われる。また、第I図版の最初の反応が「全部黒と白」という色彩命名反応であり、第II図版の赤色部分に対する反応（「赤は分かりません、あるいは肉かなにか」）にも一次的な色彩反応Fbがスコアされていることを踏まえると、衝動性が優位な状態であると考えられる。体験型が、運動反応:色彩反応=0:3.5であり、内的な資質によるコントロールが乏しい「自己中心的外拡型」（ロールシャッハ、H. 1998/1972:205）であることから、衝動的で情動の不安定さを伴い、「情動的被暗示性」（ロールシャッハ、H. 1998/1972:105）が高い状態であったかと推察される。

1913年当時の患者Gは、母親イメージと父親イメージを基に対照的な友人選択をしており、Rorschachが、「Gは父親を欲しい気持ちと母親を欲しい気持ちとから友人を選び出した」（ロールシャッハ、H. 1986/1913b:89）と結論していることを踏まえれば、依存の問題を抱えていたものと推測される。アルコール中毒の問題が慢性化した背景に両親への依存の問題が推測される。

5. おわりに

以上、三つの症例のプロトコルはいずれも後年のものであり、しかも反応領域や反応概念と図版の適合性等は確かめようがなかった箇所が多いため、その価値がどれほどものものかは甚だ疑わしいものである。ただ、いずれの症例も最終的には超越的な存在や世界を巡って宗教的な救済観念を発展させた症例であり、内的な運動感覚と情動性のバランスという体験型のテーマから、体験型の人生における変容というテーマを経て、宗徒研究に発展したRorschachの志向性を理解するヒントになるのではないかと考えている。

文献

- Bash, K. W. (1965). *Vorwort*. In: Rorschach, H. (1965). *Ausgewählte Aufsätze*. Zusammengestellt und herausgegeben von Bash, K. W., Verlags Hans Huber. 9-15.
- 川原稔久 (2015). H. Rorschachの“反射幻覚と象徴”について. 大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要, 第8号, pp. 3-8.
- 川原稔久 (2016). ロールシャッハ論文集にみられる象徴解釈について. 大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要, 第9号, pp. 3-8.
- Rorschach, H. (1948/1921). *Psychodiagnostik- Methodik und Ergebnisse eines wahrnehmungsdiagnostischen Experiments (Deutenlassen Zufallsformen)*. Sechste revidierte Auflage. Huns Huber.
- Rorschach, H. (1965). *Ausgewählte Aufsätze*. Zusammen- gestellt und herausgegeben von Bash, K. W., Verlags Hans Huber. バッシュ, K. W. (編) 空井健三, 鈴木陸夫 (訳) (1986). 『ロールシャッハ 精神医学研究』みすず書房.
- Rorschach, H. (1965/1912). *Reflexhalluzinationen und Symbolik. Ausgewählte Aufsätze*. Zusammen- gestellt und herausgegeben von Bash, K. W., Verlags Hans Huber. 105-152. ロールシャッハ, H. (1986/1912). 「反射幻覚」とその類似現象について. バッシュ, K. W. (編) 空井健三, 鈴木陸夫 (訳). 『ロールシャッハ 精神医学研究』みすず書房. pp. 45-68.
- Rorschach, H. (1965/1913a). *Analytische Bemerkungen über das Gemälde eines Schizophrenen. Ausgewählte Aufsätze*. Zusammen- gestellt und herausgegeben von Bash, K. W., Verlags Hans Huber. 178-183. ロールシャッハ, H. (1986/1913a). 一精神分裂病患者の絵に関する分析的覚書. バッシュ, K. W. (編) 空井健三, 鈴木陸夫 (訳) (1986). 『ロールシャッハ 精神医学研究』みすず書房. pp. 82-85.

- Rorschach, H. (1965/1913b). Über die Wahl des Freundes beim Neurotiker. *Ausgewählte Aufsätze*. Zusammenge­stellt und herausgegeben von Bash, K. W., Verlags Hans Huber. 183-188. ロールシャッハ, H. (1986/1913b). 神経症患者における友人選択について. バッシュ, K. W. (編) 空井健三, 鈴木睦夫 (訳) (1986). 『ロールシャッハ 精神医学研究』みすず書房. pp. 86-89.
- Rorschach, H. (1965/1914). Analyse einer Schizophrenen Zeichnung. *Ausgewählte Aufsätze*. Zusammenge­stellt und herausgegeben von Bash, K. W., Verlags Hans Huber. 188-194. ロールシャッハ, H. (1986/1914). 一精神分裂病患者の素描の分析. バッシュ, K. W. (編) 空井健三・鈴木睦夫 (訳) (1986). 『ロールシャッハ精神医学研究』みすず書房, pp. 90-97.
- Rorschach, H. (1972/1921). *Psychodiagnostik- Methodik und Ergebnisse eines wahrnehmungsdiagnostischen Experiments (Deutenlassen Zufallsformen)*. Neunte revidierte Auflage. Huns Huber. ロールシャッハ, H. (1998/1972). 鈴木睦夫訳 (1998). 『新・完訳 精神診断学』. 金子書房.